

ご自由にお持ちください

歴史ある中川区にはたくさんの昔話が伝えられています。『むかしばなし中川区風土記』（山田寂雀/編集）の中からいくつかの話をご紹介しながら、その背景を探ります。地域に关心を深めるきっかけにしていただければ幸いです。

昔話から見た中川区-1-



露橋神明社

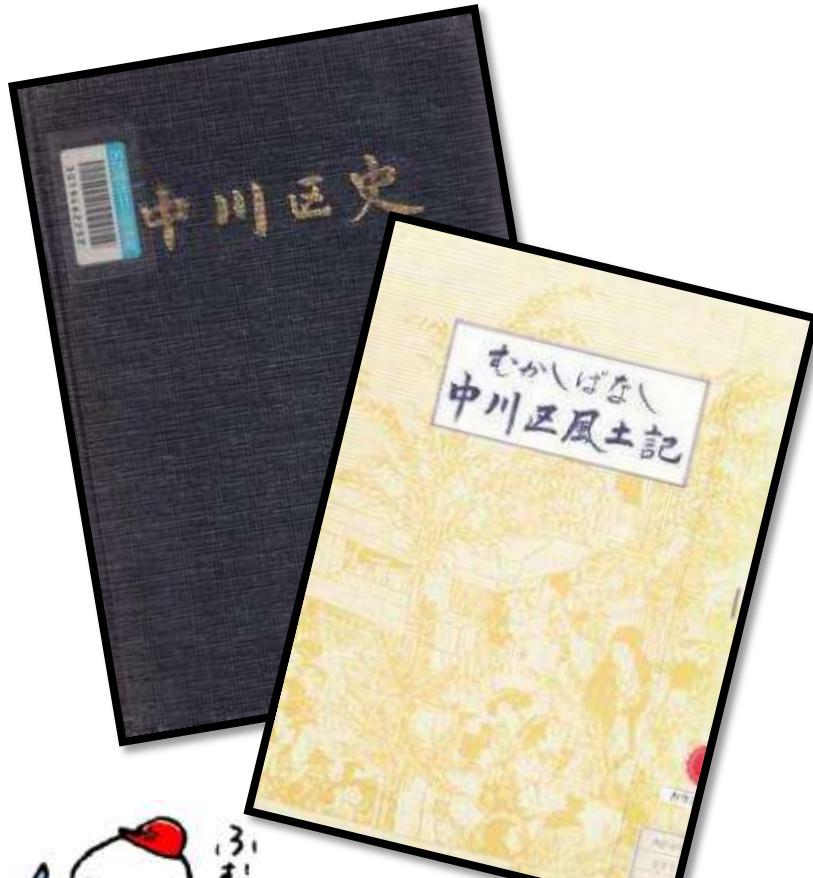
名古屋市中川図書館

〒454-0874 名古屋市中川区吉良町 178-3

電話 052-353-5311



むかしばなし中川区風土記



荒子にちなんだ
中川図書館キャラクター
「あらっこ」

『中川区史』は、中川区制施行 50 周年記念事業実行委員会が 1987（昭和 62）年に発行した中川区の歴史がわかる参考図書です。

『むかしばなし中川区風土記（ふどき）』は区史に合わせて、郷土史家・山田寂雀（せきじゃく）氏が編集された中川区の魅力を伝える昔話集です。

どうぞ図書館でお尋ねください。



オシャモジサマ（昔話概要）

孫作は、風邪のため高熱にうなされていました。とくに、咽喉が痛いと言っています。おかみさんもこれはたいへんと、氷で頭をひやすやら、煎じ薬を煮つめるやら、それはおおいそがしでした。

そんなとき、戸口で、お経の声がして、ひとりの僧が托鉢にやってきました。おかみさんは亭主が病気でお布施どころではないので、大声で、追いかえそうとしました。しかし、その僧は、別段おこることもなく、きちんと、お経を読み終わってから、おかみさんに、「どうやら、ご病人がいるらしい。お社宮司さまより、しゃもじをかりてきて、頭と咽喉をさするとよい。」といって、となりの家へいってしまいました。おかみさんは聞きながらしていました。その夜になって、孫作の咽喉のいたみは更に、激しくなり、七転八倒の苦しみです。こうなると、もうおかみさんも、昼間の坊さんの言葉でも、薫をもつかむ思いで、社宮司社に夜中にもかかわらず出かけました。



昼でも、暗いところで、田んぼの真中にある塚がその社宮司社のお社です。土地の人はその塚を「おしゃごし」といっていました。やっとのおもいで、しゃもじを一本かりてきて、亭主の咽喉にあてて、さすりました。

不思議にも、そのはれが、だんだんひいて、孫作は寝入ってしまいました。翌朝おかみさんはうれしさのあまり新しいしゃもじを社宮司社に供えました。社宮司社はオシャモジさまともいわれています。西宮神社に、大きなしゃもじが奉納されています。明治に小さな社を整理した時に、社宮司社は金山社にまつられ、さらに西宮神社の境内社になったといわれます。

このあたりは、名古屋城築城の際の石切場といわれ、石工が住んでいたようです。社宮司は本来、石神のことと、社宮司の社は駿河、信濃、美濃あたりに多くみかけます。とくに起源は美濃とされ、ここより移り住んだ人たちにより社宮司がひろまりました。中川区にも「おしゃごし」はあちこちにあったようです。



オシャモジサマ（解説）

シャグジ、シャゴジ、ミシャグジ、オシャゴジ、オシャモジは古い時代からの中部地方における民俗信仰の名残だと言われており、愛知県各地に社宮司（しゃぐうじ）信仰があるようです。漢字では、社宮司、西宮神、斎宮神、三狐神、石神、御左口神などと表記され、信仰の起源は、石の神を祭ったという説が有力ですが、ほかにも、豊臣秀吉による太閤検地で用いられた竿（さお）を祭ったという説、神社の社殿改修の折に神が一時遷った場所に由来するという説など様々な説があります。



西宮神社・金刀比羅神社に奉納されている大きなシャモジ



『オシャモジサマ』の舞台は、かつての愛知郡北一色（きたいっしき）村や米野（こめの）村です。現在、中川区愛知町一帯にあたり、かつては、現在中川運河の小栗橋の北北西に松の木のあるこんもりとした塚があり、石が祭られていたと言います。この社宮司社は、現在では月島町の西宮（にしのみや）神社に祭られています。境内にはシャモジが奉納され、疣（いぼ）を治す神様として信仰されています。シャモジは、シャグジという言葉からの訛りでしょうか。

神社付近は、中川運河以前は笈瀬川（おいせがわ）が流れていました。



平成26(2014)年 国土地理院基盤地図情報



大正12(1923)年 陸地測量部



名古屋城築城の際には、川を運搬された石垣の石を加工する場所（石切場）となり、当時石工が住んでいたそうです。当地のオシャモジさまにはこのような歴史も深く関係していると考えられます。

西宮神社は金刀比羅（ことひら）社と一緒に祭られています。これは、昭和5（1930）年に中川運河が開通したのを記念して金刀比羅社を運河総鎮守としたもので現在の境内は昭和15（1940）年に整備されました。



【参考資料】

- ・『名古屋地方の社宮司信仰』 蜂谷季夫/著 天白川流域研究会
- ・『中川区の昔をたずねて 第2巻』 名古屋市中川区社会福祉事務所福祉係
- ・『地図でみる露橋の歴史』 露橋小学校開校100周年記念事業実行委員会





悲しい笹笛（昔話概要）

二百年程前の話です。二女子村のそばに佐屋街道がとおっていました。熱田の宮から、ここ二女子をとおって、岩塚を経て、佐屋までいく街道です。

この街道のある寺に、可愛い娘が生まれました。娘の名をおむめといって、両親のいつくしみのままに、幸福な日がつづきました。しかし、おむめの七才のとき、父は僧の位をあげるため、諸国に修行にでかけました。父はうしろがみをひかれる思いでしたが、いたしかたないと悟りました。父はおむめに、「筆笛のつくり方を教え、淋しくなったら、この笛をふきな、ととさんもどこかで吹いていいから」と、いって、先ず西国へ旅立ちしていきました。

それから、いくつかの歳がたちました。おむめは雨の日も、風の日も街道に立って、僧の姿をみては、もしや、ととさんではないかと、かけよりましたが、どの人もちがっていました。西の養老山脈に、真赤な夕焼けがかかりましたが、今日もだめでした。おむめは筆笛をつくり吹きました。



ととさん こいしや 西の空 いまごろ どこで どうしやる

花のかおりも いろあせて

それからまた、歳が経ちました。一方、他国の空の下では、やつれた父は、おむめの年頃の娘をみてはこいしさがたかになりました。今夜もとまるところもなく、野宿することになり、父の口元にはいつか笛がありました。

おむめ こいしや 旅の空 いまごろ里で なにしやる

さびしさきそう 箫の音

いつしか、まどろんだ夢のなかに、妻や娘の姿がうかんで、なにかをいいたそ
うにしています。はっと目をさました父は、いてもたってもいられず、ふるさと
めざしてとんでかえりました。

やっと着いたのは秋の初め、日もとっぷり暮れた夜でした。なつかしい寺はさ
びれ果てて暗い本堂にろうそくの火が風にゆられていくばかりです。あとでわかつ
たのですが、母娘はこの夏のはやり病で、父の帰りを千秋の思いで待ちながら
世を去りました。悲しみにくれた父は何処へともなく去っていったそうです。



悲しい笛笛（解説）

話の舞台である二女子（ににょし）村は珍しい地名です。これは昔の領主の娘たちに由来するという説があります。今では残っていませんが、かつては一女子（いちにょし）から七女子（しちにょし）まで7つの村があったようです。『尾張名所図会（おわりめいしょずえ）』によると、昔この付近に7人の娘を持つ領主がおり、娘に土地をつけ、7か所に住ませたそうです。これがもとになり7つの村が誕生したと言われます。

定かではありませんが興味深い話です。



『尾張志付図』



大正12（1923）年 陸地測量部



二女子村には佐屋（さや）街道が通っています。この街道は佐屋路とも言い、熱田区に位置する東海道の宮（みや）宿から、中村区の岩塚（いわつか）宿、中川区の万場（まんば）宿、津島市の神守（かもり）宿を経て、愛西市の佐屋宿を結んでいました。佐屋宿から東海道桑名宿までは船が通っていました、海の荒天に左右されにくく東海道の脇街道として重要な役割を担っていました。3代將軍徳川家光、シーボルト、明治天皇も利用したことが知られています。

二女子にある熊野神社

【参考資料】

- ・『日本歴史地名大系 第23巻（愛知県の地名）』 平凡社
- ・『中川区の歴史』 山田寂雀/著 愛知県郷土資料刊行会
- ・『なごやの町名』 名古屋市計画局

